

# 火星

平成二十三年六月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

葉桜となりし夜風のかたちかな

蜜柑山ひたと照りゐる武器飾

望渡りゆく花どきの蜜柑山

十葉を刈り牛相撲見にゆくと

母の日の闘牛場の椅子に在り  
闘牛の果てたんぽぽの絮とぶとぶ  
行く先の在りて脱ぎある蛇の衣  
午を軋める花合歡の下の舟  
麦秋の只中をくる僧と子と  
愛染堂はや夏陰を置きあたり

# 太白星

柳生千枝子

待春の音をふりまき宣伝機  
白梅の日陰日なたの色違ふ  
下萌や掌のやはらかき母と行く  
臘梅の香に呼ばれをり昼の月  
少女らのハミング響き春よ来い  
恋猫の背の冷たさが帰り来て  
一群の盗賊かもめ春渚

杉浦典子

磐座のうらにまはりし春しぐれ  
落椿つまみし指のぬれにけり

鳥の巢に鳥ゐるけはひ夕明り  
しやぼん玉沓脱石に日の温み  
鳥の巢の映つてゐたり硝子のビル  
芽柳のまち焼売のにほひして  
里宮の手水あふるる春の雨

浜口高子

眼の前に小島ありけり柳絮とぶ  
囀や池巡る綱ゆるびなし  
引き鶴のはるかへ声を絞りけり  
鶴引きし観察日誌吊られあり  
鏝の噴く廢船の骨柳絮とぶ  
水面におぼろを嗅げる河馬の昼  
朧夜のわしづかみせし花がつを

# 火星作品 山尾玉藻選

桑畑に父の影ある卒業期 大和郡山城 孝子  
挿木して夕べゆつくり使ひけり  
紙ひひな倒れる度に笑ひけり  
鳥の巢の整うて来し風の中  
水の上の椿向き向き春休  
岩肌のどこからとなく春の水 明石戸栗末廣  
らふそくは昼を灯せり鳥雲に  
春昼の枢にとどく水の音  
鶴引くやじやがたらの芽のくれなゐに  
かんばせの暮れてをりけり花菜みち  
寄合ひの後のあてなき柳絮かな 神戸深澤 鱧  
引きどきの鶴を思へば酒余し  
帝にも話のおよぶ雛道具

貴椿砂の箒目踏みてゐし  
ことごとく墓碑に頭のあり鳥雲に  
バケツ一杯に菜の花を活く忌日  
餅花煎嚙む信心の音したり  
母恋の乙女椿をひいふうみい  
鹿の子の生飯の包みを咬みにけり  
何の蛹と触るればぴくと冴返る  
剪定の木にとびきりの月上る  
梅東風や蕪村の碑まで遠からず  
うつ伏せの眠りの浅し昼蛙  
「豆乳あります」さへづりの坂がかり  
雨の香の椿の花を拾ひけり  
鴨の辺に雛を流す舟仕度  
雪の夜の雛しばらく膝の上  
淡島に預けてきたり母の雛  
磨崖仏の胸の傷より芽吹くもの  
踏青やかをりに聴く音に聴く

宝塚山本耀子

蘭定かず子

山田美恵子

# 選のあとに

山尾 玉藻

卒業期父の影ある桑畑 城 孝子

卒業式を迎える頃、桑畑では括られていた桑も解かれ、早春の光を浴びて作業にいそしむ人のシルエツトが眩しい。ましてその人影が父親であれば、卒業を控えた子供の胸中には常には意識しない色々の感情が交錯するのであろう。卒業という人生の大きな節目を迎えると、誰しもこころが揺れやすくなる。回想から成った作品であるかも知れないが、「卒業期」の季節感と人の思いに普遍性がある。同時発表作〈紙ひひな倒れる度に笑ひけり〉からは女性たちの屈託のないさざめきが聞こえるようである。

岩肌のどこからとなく春の水 戸栗 末廣

たちはある日、ある時、思いがけず春の到来を実感するところがある。作者も山中を歩いていて、むき出しになった岩を濡らす地下水の様子にふと春を感じたのである。春の気配というえも言われぬ情感を、水の滲む岩肌に実相として捉えたところが手柄である。

引きどきの鶴を思へば酒余し 深澤 鱈

「お酒を楽しみながら、ふと鶴たちが北へ飛び立つ頃だと気付いた作者である。そしてこれからの鶴たちの長旅とその辛酸にまで思い巡らしている内に、少々盃の運びが鈍った様子である。「酒余し」の述懐にほどよいロマンが漂っていて好感を覚える。

バケツ一杯菜の花を活く忌日 山本 耀子

「忌日」とあるが身近な人の忌日ではないようだ。たまたまどっさり切り取ってきた菜の花をバケツの水に挿しこんでいて、ふと今日が忌日の人を思いだしたのだ。故人はきつと菜の花のように周囲を明るい雰囲気にする人だったのだろう。大らかな表現からもそのような故人の面影が伝わってくる。よいこころの色が窺える一句である。

剪定の木にとびきりの月上る 蘭定かず子

「剪定」を終えた木々の様子は夜目にもすつきりとしているものである。上ってきた月もひとときわ鮮やかに眼に映り、いつもの月ながら格別に美しいと感嘆する作者である。「とびきり」の措辞がとびきり活きた。

(以下略)

同人 I

# 恒星圈

松井倫子

啓蟄の林中を飛ぶ鳥の影  
啓蟄の靴脱ぎ上がる郷土館  
花曇子の吹くアルトサキソフォン  
頬赤く自分の雛と告げにけり  
露台から下向けて吹く石鱈玉

藤原冬人

松山直美

春寒や津軽平野に野火ひとつ  
林檎円く剥きたる母は花りんご  
羽後人の肌うつくしき鳥曇  
鱈東風浜に並べよ大漁旗  
はなずはうひらりと猫の消えにけり

四つ手網白魚青く零れけり  
啓蟄やトランポリンに子ら弾け  
春愁や人形展の昭和の子  
通し土間抜けて祇園の朧なる  
丹波路の木々は紅もて芽ぶかむと

堀志皋

丸山照子

その色のゆかし土筆の胞子かな  
亡き母が妻の座にあり春の夢  
水面を海老跳び逃げる追ふ針魚  
信号を二回で渡る春の月  
山頂や水平線や霾ぐもり

セーラー服のアルバムの母山笑ふ  
九十の華髪なりけり百千鳥  
桃咲くや母の衣服に姓と名  
車椅子のひとり母の春帽子  
丘の上に介護ホームや春の月

# 獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

予定なきバレンタインの黒靴  
初蝶を見失ひたる日向かな  
山笑ふ壁に清掃当番表  
白地図の上の鉛筆夕ひばり

井上淳子

切株に猫の爪研ぐ涅槃西風  
海峡の汽笛に椿落ちにけり  
落椿をしべめしべに日の温み  
神前の手水に作法風光る

藤田素子

白木蓮の空いつぱいの祈りかな  
還暦のロツクンローラー鳥雲に  
クローバー探す頭のくつつきぬ  
きさらぎの門にイエスの言葉あり

西村節子

菜の花の川渡りけり野辺送り  
靴ぬいで砂丘を登る春日傘  
対岸の十字架高きおぼろかな  
鳴き真似に猫の振り向く朧月

天谷翔子

停電の夜明け大樟囀れる  
初つばめ皇居の風に乘りにけり  
子の画布のたんぽぽの黄のあふれさう  
母にこゑ似てきたるらし鳥雲に

助口もも

日かげりし仁徳陵や鳥渡る  
桃の日の酒屋の倉庫開いてあり  
知らぬ間に雪ちりぬたり立子の忌  
紅梅にしばしとどまる盲導犬

奥田順子

舟入の奥の丸窓春灯す  
紙屋橋車屋橋と芽吹くかな  
秀次の塚の辛夷に長居せし  
進級す縄とびしつっ丈伸びつ